

地域は舞台

秋葉祭り

(高知県吾川郡仁淀川町)

集落に 人を呼び込む 祭りの力

過疎と高齢化に悩む限界集落。

祭りを守るために、

祭りを外に向かって開く決断をした。

秋葉祭り

土佐三大祭りのひとつであり、高知県保護無形民俗文化財である。2月11日、建国記念の日に開催される“練り”と呼ばれる華麗な行列には、1万人の観光客がつけかける。しかし祭りが催されるのは標高700～1000メートルのいわゆる限界集落。秋葉神社祭礼練り保存会では、1975年、祭りで重要な役割を果たす子ども達を、他地区の小学校から借りてくることを決断。今ではその子ども達が成長して祭りの中核を担い、祭りを縁に集まった人々が、祭りと地域の活性化のために尽力している。2010年、サントリー地域文化賞受賞。





(上)練りの終着地点・秋葉神社で披露される「鳥毛ひねり」。(下左)鳥毛役は子ども達の憧れの的。(下中)土佐山内家の大名行列で使われた大鳥毛を模した鳥毛。(下右)鳥毛をキャッチする側は、ひねりを利かせた独特の舞いを舞う。



春まだ浅い仁淀川町別枝地区。人口72人、高齢化率は76%を越える。

切り立った山々の稜線が幾重にも続く四国山地の山道を、車は延々走り続ける。やがて大きなダムを越え、さらに少し進むと、急な斜面の中腹に突然集落が現れた。

高知県吾川郡仁淀川町別枝地区。ダイナミックな高低差で縦方向に広がる

風景の中に家や茶畑が点在し、それらを細い坂道が結んでいる。同じ県内でも、高知市内中心部に比べると、ここは別世界。

この集落こそは、土佐三大祭りのひとつと言われる秋葉祭りの舞台である。年に一度の祭りの日には、人口百人に満たないこの村で総勢二百名の大行列を行い、一万人の見物客が訪れ、日頃静かな村の道路は数千台の自家用車と観光バスで埋め尽くされ渋滞を引き起こすという。

アクセスも決して良いとは言えない山奥の集落に、人口の百倍もの人数を呼び込む祭りとは、いったい何なのか。二百年以上の伝統を持つ秋葉祭りは、地域の氏神である秋葉神社の御神体が、地区内の祭神ゆかりの地を三日間かけて神幸する大祭である。最終日の「練り」と呼ばれる大行列はとりわけ有名

で、これを目当てに大勢の見物客が集まる。フォトジェニックな祭りゆえ、アマチュアカメラマンの数の多さも半端ではなく、この日一日、村は熱気に包まれる。

練りの花形は、なんとと言っても鳥毛ひねりだろう。火事装束の若者が、二人一組で舞いながら、長さ六・五メートルの鳥毛という毛槍を交互に投げ合う。鳥毛の先には、東天紅(高知県産の鳥で天然記念物)の尾羽で作った大きな冠飾りが付いている。試しに持たせてもらったが、重量はさほどでもないのかかわらず、バランスを保つて垂直に持ち続けることは難しい。鳥毛ひねりではこれを垂直に立てた状態で、十メートル離れた相方に投げ渡す。受ける方は、飛んできた鳥毛をジャンプして掴み取り、着地と同時に体をくると反転させて肩に担ぎ、体重をかけてバランスを取りながら、倒さぬよ



「キョウサー、キョウサー」の掛け声のもと、左右に激しく揺さぶられる荒神輿。神輿守りの男たちも、ほとんどが外部からの助っ人である。



笑いの渦を巻き起こすひょうきんな「油売り」。

裁ち落とされた踊り棒は、火事除けのお守りとして珍重されるため、ひよつとこの面をかぶった油売り(商人)などがこれを観客に売り歩く。
踊り以外にもメインの神輿、鼻高(天狗面)、悪魔(鬼面)、獅子舞、狐など、盛り沢山な祭りの要素が賑やかに登場



行列の進行全体を見守り、采配を振るうのは「鼻高」の役割。

する秋葉祭りは、日本の祭りの集大成とも言われているが、その盛り上がり一方で、地域の抱える過疎高齢化問題は、深刻な局面を迎えている。
別枝地区を構成する三つの集落、本村・沢渡・霧ノ窪では、この三十年近く子どもが生まれていないため、今で



太刀踊りの子ども達の全員が、人口が多い他地区の子ども達だ。



練りの行列がスタートする岩屋神社。

うに持ち堪える。
アクロパティックなパフォーマンスが成功すると、観客からは拍手喝采、どよめきが沸き起こり、カメラマン達の切るシャッターの音がシャワーのように降り注ぐ。観衆の注目を浴びながら大技を披露する踊り手の若者は、甲子園のピッチャーのような晴れやかな存在だ。
武者姿の子ども達が奉納する太刀踊りも人気がある。小学校低学年の子ども達が刀を、少し上の年齢の子も達が竹製の踊り棒をそれぞれ手にし、渡り合いながら踊る。太鼓や笛のお囃子に合せて小さな武士達が踊る姿はあどけなく可愛らしいが、使われている刀はイミテーションなどではなく、非常に良く切れる真剣だ。音頭が終わると、ホラ貝を吹き鳴らす音を合図に刀と踊り棒を一齐にぶつけあい、踊り棒はスパッと裁ち落とされる。



(上)アップテンポの囃子にのり、狐面、油売り、獅子が神楽を舞う。
(下)練りの到着を待つ観客に、油売りがお守りを売り、場をつなく。

は踊り手をはじめ、参加者の多くを近隣集落から集めている。観光地の集客イベント的性質の祭りは別として、このような小さな集落のリアルな神事としての祭りに、共同体外部の人間が多く参加することは珍しい。しかしここでは存続する知恵として、祭りは外へ向けて開かれた。

「昔は子どもも多く、踊りたくても長男しか出られなかったり、兄弟で交互に踊ったりしたのですが……」

祭礼練り保存会の前会長、吉岡郷継氏は話す。

「祭り自体はこの先まだ三十年は続けてはいけるでしょうが、肝心の集落が、現状ではあと何年持つのかわからない。住む人がいなくなり、集落が消滅すれば、ここはただの山になってしまふ。ただの山の中で行列だけが残つても、それは祭りとはいえないし、やる意味がなくなってしまう」

語り口調は穏やかだが、その言葉は切実だ。

別枝地区は、かつて三楮^{みつた}産業を主な現金収入源として栄えたが、昭和三十年代、三楮を原料とする百円札が百円硬貨に取って代わられると、その価格は暴落し、多くの住民が外部への転出を余儀なくされ、急激な過疎化が始まった。さらに時が立つと、高齢化も進

んだ。

住民も、状況にただ甘んじていた訳ではない。

「秋葉まつりの里を元気にする会 えんこ巖」という組織がある。祭りの運営にかかわる人々が中心となって立ち上げたこの会は、県外に暮らす地元出身者と連絡をとり、地域に戻ってきやすい環境を整えたり、作物の共同生

産・販売やイベントを通じて地域の活性化を計る。祭りに魅せられこの地に移住してきた東京出身の若い女性も中心メンバーとして活躍しており、「仲間を増やそう」という会のスローガンは、少しづつかもしれないが、確かに実を結んでいる。

Uターンしてきた人もいる。練り保存会会長の片岡和憲氏もそのひとり。

時代を越えて多くの人々に愛され続ける秋葉祭りは、外部から人を呼び込むだけでなく、一度は故郷を離れた人をも呼び戻す。もちろん、今いる人を留める効果もあるだろう。別枝地区の集落が、十年後どのような姿になっているのか、正直私には分からない。しかし、祭りを通じて土地に心を寄せる人々がいる限り、その祭りには地域を活かす力があると私は信じている。

撮影・文 桑田瑞穂



(上) 行列の参加者、関係者に振舞われる酒とさわち料理。(下2点)「えんこ巖」をはじめ、地域おこしのグループや役場、農協なども、様々な形で祭りに関わっている。

連絡先：仁淀川町産業建設課

〒781-1592

高知県吾川郡仁淀川町大崎124番地

TEL：0889-35-0111

<http://www.town.niyodogawa.lg.jp/>